篠崎医院小児科坪井芳治医師

泉　彪之助

著者は、魯迅の医史学的研究の一環として『魯迅日記』に現れた医療関係者の経歴を調査中、魯迅令息周海嬰氏の主治医であった篠崎医院（上海）小児科坪井芳治（よしはる）医師が、蘭学者坪井芳州の孫、すなわち坪井信道の曽孫にあたることを知った。この系統の坪井家については、青木一郎、仲田一信両氏の詳細な研究があるが、魯迅との関係の指摘は初めてと思われるので調査しえたことを報告したい。

坪井信道の塾頭大木忠益は、信道の二女幾と結婚して坪井為春（芳州）と名乗った。二人の男子があったが、次男次郎のみが成人した。坪井次郎は、文久二年江戸浜松町に出生、明治十八年帝国大学医学部を卒業、衛生学教室に勤務。明治二十年助教授となり、ドイツに留学、ミュンヘン大学でエンメリッヒに師事した。帰国後、明治三十二年京都帝国大学教授および初代の京都帝国大学医科大学長となり、衛生学と細菌学を担当したが、明治三十六年七月十三日四十一歳で死去し、京都市相国寺に葬られた。妻国子は、三井合名会社理事有賀長文の妹で、二人の間に四人の子があった。

坪井芳治は、次郎の長男として明治三十一年六月二十三日東京市小石川区で出生。父の転勤に伴って京都に移り、京都府立京都第一中学校、第三高等学校を経て、大正十三年京都帝国大学医学部を卒業した。慶応大学医学部小児科学教室に学んだ後、大正十五年上海の篠崎医院小児科に就職。昭和二十三年まで上海に在住した。

篠崎医院は、戦前の上海市における日本人経営の二大病院の一つである。明治三十二年に鹿児島県立医学校出身の医師、篠崎都香佐によって西華徳路に創設されたが、後に虹口区篷路（現、塘沽路）に移転し、東京帝国大学出身の副院長秋田康世が大正十一年に経営権をゆずりうけて院長となった。篠崎医院の建物は現在も残っており、上海市衛生防疫站となっている。

魯迅令息周海嬰は一九二九年に出生したが、幼時病気を

した折り、日本人医師の診療を受けた。一九三二年五月から一九三三年六月まで坪井芳治医師が診療にあたり、その後、魯迅最後の主治医であった須藤五百三医師が魯迅一家の診療をするようになってからは、須藤医師が海嬰も診療している。

坪井芳治医師は、魯迅一家に医師として接したのみでなく家族ぐるみの交際をし、また文学好きであった坪井医師は魯迅としばしば文学論をたたかわせたという。『魯迅日記』には、坪井医師の家を訪問した記事また一家を迎えた記事がある。『魯迅日記』、『集外集拾遺』および『魯迅詩稿』によれば、魯迅は坪井医師に二篇の詩を揮ごうしているが、現在坪井家にはいずれも発見されていない。

戦後坪井芳治医師は、昭和二十三年日本に引き揚げ、東京都台東区柳橋で開業、昭和三十五年九月四日に死去した。墓は東京都谷中霊園にあり、坪井為春と合葬されている。

坪井芳治は大正十五年に石川三輪子と結婚、二人の間には四人の子女があり、三輪子未亡人、四人の子女とも健在である。

『魯迅日記』には、坪井芳治医師の友人として上海紡績会社社医樋口良平の名が出てくる。慶応大学医学部小佐野満教授の好意で、この樋口医師が同大学の出身で同大学小児科学教室で学び、戦後新潟県で病院勤務などを行ったことが判明したが、その後の経歴の調査に成功せず、詳細は不明である。

主要文献

『魯迅日記』、『集外集拾遺』、『魯迅詩稿』
青木一郎『坪井信道の生涯』昭和四十六年
青木一郎『坪井信道詩文及書翰集』昭和五十年
仲田一信『埼玉県立医学校と日習堂蘭学塾』昭和四十六年
『京都日出新聞』、明治三十六年七月
泉彪之助「須藤五百三—魯迅最後の主治医—」『福井県立短期大学研究紀要』第十号、昭和六十年三月
泉彪之助「魯迅日記における医療　第一報　基礎的検討」『福井県立短期大学研究紀要』第十一号、昭和六十年九月

（福井県立短期大学第一看護学科）